

欧州サッカーにおけるグローバリゼーションの影響

The effect of globalization in European football

1K07B018-8 伊藤 亘

指導教員 主査 石井昌幸先生 副査 寒川恒夫先生

はじめに

1945 年から始まった米ソ冷戦は 1989 年に終結を迎えた。その結果唯一の超大国となったアメリカ合衆国を中心とした世界が構築され、「グローバリゼーション」という言葉は、経済・政治・文化のどの面においても共通して重要な意味を持つようになり、現代を論じるうえで欠かせない概念となった。社会の様々な場面で変化を起こしたグローバリゼーションはスポーツの世界にもその影響をもたらしたと考えられる。殊にサッカー界には顕著にその影響をみてとることが可能である。そのなかでも一流のプロ選手の移動・トップリーグへの集中は世界のグローバル化を最も象徴する現象であろう。

このような現象には一定の傾向がみられると考えられる。そこにはどのような要因からどのような傾向がみられ、またそれがナショナリズムや国家観にどのような影響を与えているのかを考察し明らかにした。

第 1 章 グローバリゼーションがワールドカップに与えた影響

冷戦以前の 1970 年、冷戦以後の 1994 年、2010 年にそれぞれ開催されたワールドカップのベスト 8 進出国の代表選手が在籍していたクラブを調査し、そこにみられる傾向を分析し、グローバリゼーションがワールドカップに与えた影響について考察した。

’70 年大会においてはほとんどの代表選手が自国リーグのクラブに所属していたのに対し、冷戦後の’94、’10 年大会は国外のリーグのクラブに所属している選手が急増していることが明らかとなった。

かつては代表チーム=自国リーグの選抜チームであり、ワールドカップはもっとも競技水準の高い大会であったと考えられる。しかし、グローバル化により引き起こされた選手移動の激化はクラブの多国籍化を引き起こし、ワールドカップでみられるゲーム以上に質の高いゲームを生み出すことを可能にし、ワールドカップが持つ大会の価値や意味を変化させたと結論づけた。

第 2 章 欧州 3 大リーグにおける外国籍選手の数と傾向

イングランド、イタリア、スペインの 3 つのリーグに在籍している選手の国籍を調査しまとめた。そのデータをクラブ単位でみた場合は、強豪といわれるクラブほど多国籍化が進み自国籍選手の割合が低い傾向がみられることが判明した。またリーグ単位で分析した際は①イングランドプレミアリーグにおける自国籍選手割合の際立った低さ、アフリカ国籍選手の多さ、②セリエ A、リーガエスパニョーラにおける南米選手の多さ、③3 つのリーグすべてに共通するフランス国籍選手の多さという 3 つの傾向がみられた。

第 3 章 欧州 3 大リーグ外国籍選手の構成にみられる傾向の分析と考察

プレミアリーグの自国籍選手割合の低さや強豪クラブの多国籍化は経済的な成功がその要因として考えられ、プレミアリーグのアフリカ国籍選手の多さやセリエ A とリーガエスパニョーラにみられる南米国籍選手の多さは旧宗主国と植民地国の関係が影響しているものと考察した。また、フランス国籍選手の多さは育成機関が充実しているにも関わらず税率が高いことが選手流出に拍車をかけているものと結論づけた。

第 4 章 選手移動に関するルールの変遷とナショナリズム

ここでは選手移動に関する制度の変遷を取り上げ、それらがどのような思想のもとに発案されたかをインタビュー記事などをもとに考察した。

ボスマン判決は、国家という単位よりも大きな政治単位を重要視する立場をとったが、その後に発案された 6+5 ルール、ホームグロウン制度は近代国家という枠組みを重要視する思想を反映したものであると考察し、選手移動が激化している現状に欧州サッカー界が歯止めをかけようとしているものであると考察した。

また、スペインにおけるバスク代表やカタルーニャ代表にみられる地方代表チームの出現は、国家よりも小さな民族という単位に分化していく現代のナショナリズムの思想を反映したものであると結論づけた。